

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 19 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370482

研究課題名(和文) モンゴル語仏典を活用した中期語における言語接触と言語変容の研究

研究課題名(英文) Studies on language contacts and linguistic changes found in Middle Mongolian in view of Mongolian Buddhist works

研究代表者

樋口 康一 (HIGUCHI, Koichi)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：20156574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：モンゴル語仏典は14世紀に編纂されたもので、そこにはモンゴル仏教の汎ユーラシア的性格と元朝社会の多民族・多言語状況が反映され、ウイグル語、チベット語、漢語等の周辺諸言との接触の痕跡が豊富に保存されている。本研究は、研究代表者の年来の蓄積に立脚しつつ最新の知見を取り入れて、中期語の時代以降の言語接触の実相を解明し、それがモンゴル語の構造にいかなる変化を招来したかを検討することを目的とする

研究成果の概要(英文)：Most of Mongolian Buddhist works available at present are productions of the 17th century of after but their originals can be traced back as early as the 14th century. The language in which they were written is Middle Mongolian, of which the character has not been wholly clarified.

研究分野：言語学

キーワード：中期モンゴル語 言語接触 モンゴル語仏典

1. 研究開始当初の背景

モンゴル語の歴史は、古代・中期・近代に三分される。古代語は文献では例証されない祖語であり、近代語は17世紀以降のチベット仏教の普及にともなう印刷物の急増とそれに応じた正書法の確立以降、現代に至る諸方言の謂である。両者の中間段階に当たるのが中期語であり、代表的資料としては漢字音でモンゴル語を写した『元朝秘史』が名高いものの、資料に乏しく全貌にはなお不明な点が少なくない。現在目睹し得るモンゴル語仏典の多くは、清朝時代の作成にかかるもので、総量は膨大でも言語資料的価値は乏しいと見なされてきた。ところが、長く支配的であったその通説は覆され、版本・写本自体の製作年代は後代でも、行文自体はモンゴル人が初めて仏教に親しんだ13～14世紀の中期語を忠実に残すものが多いことが明らかとなり、仏典は中期語の実相解明に裨益する格好の言語資料と位置づけられている。研究代表者も、『宝徳蔵般若経』を初めとする、従前未研究であった仏典を精査し、資料的位置づけを明確にした上で言語の特色を記述し、中期語の性格解明の一端を担ってきた。本研究はその延長線上に位置するものである。

2. 研究の目的

本研究は以上の経緯を踏まえ、従前の研究代表者の研究蓄積の発展拡充を期して着想されたものである。モンゴル語仏典は、故地のモンゴル国や中国内蒙古自治区のみならず、ロシアを含む欧米を初めとする世界各地で所蔵されている。ところが、Poppe, Ligeti等の碩学は既に物故して久しく、門弟の世代も続々と引退した欧米では、かつて盛んであ

った仏典研究はおろかモンゴル学自体の学問的継承が危ぶまれている。ロシアのモンゴル学も帝政時代以来の伝統に比して低調である感は免れない。仏典の文献学的研究では唯一の存在であったA. Sazykinは不幸にも8年前物故した。本来、モンゴル学全体を主導すべきモンゴル国では、経済的困難が仏典研究や文献学・言語学的研究の進展を妨げている。所蔵する資料の質・量ではモンゴル国を凌駕する内蒙古自治区では、現代的手法に基づく文献学・言語学的研究が漸次軌道に乗つつあるが、仏典研究はその端緒に着いたばかりである。モンゴル語としては特殊な仏典の言語を自在に読解するには、一定の訓練が必要だけでなく、サンスクリット・チベット語・ウイグル語等、周辺諸言語の知識が欠かせないため、研究者の育成には時間を要する - これはわが国にも妥当するが - ことが大きな一因と考えられる。

要するに、その学術的意義は明確に了解されているにも関わらず、モンゴル語仏典の文献学的・言語学的研究の研究者は少なく、研究代表者を初めとする数名が孤軍奮闘している状況である。そこにはモンゴル仏教の汎ユーラシア的性格と元朝社会の多民族・多言語状況が反映され、周辺諸言語との接触の痕跡を豊富に保存されている。接触の結果誕生した仏典モンゴル語は『元朝秘史』等に見られる世俗的言語とは趣を異にした文章語となったが、それが17世紀以降のチベット仏教の弘通とあいまって、現代文語の性格の一半を形成している。本研究は、中期語時代における言語接触の実相を解明し、それがモンゴル語の構造にいかなる変化を及ぼしたかを明らかにすることを目的としたものであ

る。

3. 研究の方法

国内外の研究機関・図書館・文書館等に所蔵されているモンゴル語版を博捜し収集した上で校訂テキストを作成し、それに基づき行文の分析と記述を行った。また、行文内に残る言語接触の痕跡をたどりながら、接触の実相の解明を試みると同時にそれが言語構造に及ぼした変化を記述することを試みた。

その際、研究代表者の練り上げた研究手法と従前の研究蓄積は一定の効果を発揮した。得られた知見を活用し、モンゴル文語の形成過程における外来的要素の影響を、従前の研究成果を援用しつつ、記述した。得られた成果はそれ自体が言語資料として一定の価値を有するので、広く世に問い、その価値を知らしめた。それとともに、従前の研究蓄積を活用しながら、中期語の言語構造に与えた外来的要素の影響を特定し、元朝時代における言語接触の実相を解明し、さらに文章語成立の契機として外来語がいかなる作用を及ぼしたかを解明しようと試みた。

4. 研究成果

本研究課題にかかる成果は、もちろん相互に重複する部分はあるが、敢えて三分すれば(1)モンゴル語仏典にうかがえる元朝時代の言語接触の実相とそれが及ぼした言語変化に関するもの、(2)個別の具体的な仏典の文献言語学的研究、(3)上記(1)の成果に基づく日本語との対照研究に大別できる。以下順を追ってその概略を紹介する。

(1) ここに含まれるものは、論文 及び ならびに学会発表 である。いずれも研

究代表者の従前の、ならびに本研究課題による研究成果をもとに構想されたものであるが、特筆に価するものは論文 である。ここでは、研究蓄積に立脚した接触研究及び言語変化の実相探求の成果が具体例を駆使しつつ詳細に論じられており、その意味で本論文は今後の仏典を活用した研究の進むべき方向を示したものとなり得るであろう。

(2) ここに含まれるものは、論文 及び 、ならびに学会発表 である。論文 、学会発表 は『宝網経』、論文 は『牛首山授記経』を対象としたもので、従前の研究蓄積に新知見を加味し公にしたものである。

それ以外は、すべて『法華経』に関するものであるが、これはこの間における研究進捗状況を反映したものである。『法華経』は既に元朝時代にはモンゴル語訳されており、その一部はトルファン出土の二葉の写本断片として残っているが、現存する完本はどれもが清朝時代の製作物であり、その行文は出土断片とは異なっているが、その言語は紛れも泣く中期語である。研究代表者の一連の研究を通じて、トルファン出土の写本断片の読みを改めるべきであることが明らかとされた。また、それと関連して、輻輳した状況にある現存の写本版本の関係を整理し、この仏典の成立事情にかかる仮説が提唱された。本研究もまた今後のモンゴル語訳『法華経』研究における一指針となるものと思料でき、事実、学会においても高い評価を得ている。

(3) ここに含まれるものは、論文 及び学会発表 ~ で、学会発表 を除きいずれも現代モンゴル語における接触研究を専門とする小林陽子との共著である。外来の言語文

化をどのように受容してきたかについて、モンゴル語史が提供する知見を日本語のそれと対照することで、普遍性と特異性を抽出し、接触研究一般に寄与することを企図した試みである。学会発表（論文はこれを増補修正したものであるは、延辺自治州というまさしく接触と言語変容及び維持が喫緊の課題となっている地域で発表されたものだけに、現地においても注目を集めた。

グローバル化の進展にともなう少数民族言語の危機言語化が言語学の課題として取り上げられるようになり久しいが、本研究は迂遠なように見えて実はこれと密接に関わりがあり、すぐれて今日的な課題である。それは日本語の本質を考察する上でも、一定の知見を提供しえるものであることが、一連の研究成果を通じて明らかにされたと考えてよいであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計10件)

樋口康一，モンゴル語訳『法華経』管見（下），愛媛大学法文学部論集人文学科編40，査読無，2016，pp. 1-13.

樋口康一，文献言語学の立場から見たモンゴル語仏典，人文学論叢17，査読無，2016，pp. 1-22.

樋口康一，小林陽子，モンゴル語における言語接触の歴史と今 - 日本語の場合との対照を通じて，日語語言文化研究，査読有，2016，pp. 95-112.

Koichi, HIGUCHI. Linguistic and Philological Value of Mongolian Buddhist

Works: The case of Mongolian Versions of *Ratnajāli*. *ACTA LINGUISTICA PETROPOLITANA*. Vol. XI, Part 3. 査読有 2015. pp. 541-47.

Koichi, HIGUCHI. The Value of Mongolian Buddhist Works from the Linguistic, Philological and Historical Viewpoint. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*. 73. 査読有 2015. pp. 1-27.

Koichi, HIGUCHI. Blessing on the Top of Cow Mountain: what *Üker-ün ayula* tells us. *Anniversaries, Feasts and Celebrations in the Altaic World*. 査読有 2015. pp. 107-22.

Koichi, HIGUCHI. How were Mongolian versions of the *Lotus Sutra* translated, compiled and transmitted? : through examination of the Turfan Fragments.

Актуальные Вопросы Тюркологических Исследований. 査読有 2014. pp. 317-30.

樋口康一，文献学的視点から見たモンゴル語における言語接触研究の一樣相（下の2），人文学論叢16，査読無，2014，pp. 45-56.

樋口康一，文献学的視点から見たモンゴル語における言語接触研究の一樣相（下の1），人文学論叢15，査読無，2013，pp. 15-28.

樋口康一，モンゴル語訳『法華経』管見（中），愛媛大学法文学部論集人文学科編34，査読無，2013，pp. 41-57.

〔学会発表〕(計8件)

樋口康一，日中韓の三国間を越えた文化の交流：特に漢字文化の受容をめぐって，韓・中・日人文・文化交流国際フォーラム（韓国・全羅南道全州市・国立全北大

学校) 2016.

樋口康一，小林陽子，漢字文化との接触がもたらしたもの：日本語とモンゴル語における接触の歴史，第 45 回韓国日本語学会国際学術大会（韓国・全羅南道全州市・全州大学校）2015.

樋口康一，小林陽子，モンゴル語における言語接触の歴史と今，第 4 回中・日・韓・朝言語文化比較研究シンポジウム（中国・吉林省延吉市・延辺大学）2015.

Koichi, HIGUCHI. Mongolian Buddhist Works from the Viewpoint of Language Contacts in the Middle Period. The 58th Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, (Hotel Bonbon, Dunajská Streda, Slovakia) 2015.

Koichi, HIGUCHI. How were Mongolian versions of the *Lotus Sutra* translated, compiled and transmitted?: through examination of the Turfan Fragments. The 57th Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, (North-East Asia Research Institute, Vladivostok, Russia) 2014.

樋口康一，モンゴル語訳『法華経』の再検討，第 51 回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）（長野県上水内郡信濃町・藤屋旅館）2014

Koichi, HIGUCHI. Mongolian versions of the *Lotus Sutra*; their chronology and its implications. The 12th Seoul International Altaistic Conference. (Seoul National University, Seoul, Korea) 2013.

Koichi, HIGUCHI. Linguistic and Philological Value of Mongolian Buddhist

Works: The case of Mongolian Versions of *Ratnajāli*. Mongolic Languages: History and Present. (Russian Academy of Science, St. Petersburg, Russia) 2013.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 康一（HIGUCHI, Koichi）

愛媛大学法文学部教授

研究者番号：20156574